

宝島社文庫

クーデター
〈COUP〉

楡 周平





宝島社
文庫

クーデター

〈COUP〉

1998年12月10日 第1刷発行

著者 楡 周平

発行人 蓮見清一

発行所 株式会社 宝島社

〒102-8388 東京都千代田区一番町 25

電話：営業部 03(3234)4621／編集部 03(3239)5746

振替：00170-1-170829(株)宝島社

印刷・製本 図書印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

Copyright © 1998 by Syuhei Nire

First published 1997 by Takarajimasha, Inc.

All rights reserved

Printed and bound in Japan

ISBN 4-7966-1433-8

クーデター

〈COUP〉

楡 周平



宝島社
文庫

宝島社

戦争が、自ら欲したものではなく、常に、やむを得ずなされたものだと思いたいがために、人々は逆に、戦争の聖なる旗印を、自分達のまわりに探し求める

アラン

この世で、最上の組み合わせとは力と慈悲。最も悪い組み合わせは、弱さと争いである

チャーチル

謝辞………

諜報や国家組織に関する考え方を、素人に等しい私に専門的な立場からアドバイスして下さったM・S氏とA・I氏に。

ジャーナリズム大学院についてレクチャー下さったY・M女史に。

友人のT・Sには前作に続き銃器に関する知識をもらい、

同じく友人で管制官を務めるY・Iには航空管制の知識をもらった。

そして自衛隊の組織や爆薬に関するアドバイスに多くの時間を割いてくれたもう一人のM・S氏に。

クーデター

＜C
O
U
P＞

一つの戦争の終結は、結末がいかなるものであろうとも当事国間に一応の平和をもたらすものには違いなからう。しかし同時にそれが新たな危機の始まりであることに、ほとんどの人間は気がついていない。

かつて米軍が南ヴェトナム撤退時に同国に供与した膨大な量の兵器は、ごく一部を除いて、南北統一後に使用された形跡はない。小銃一つをとってみても、現在でも米軍で使用されているM一六が、戦争終結時には一〇〇万丁もあつたと言われるが、これらの武器がどうなつたか……その行方は今も分かつてはいない。

これは一例に過ぎず、ヴェトナム戦争終結から二〇余年、その後には起きたおおよそすべての戦争や紛争、あるいは内戦で、同様の事態が起きているのだ。兵器は実戦で使用されて初めて評価が定まり、いったん有効と評価を受けた兵器には、当然のごとく需要が生ずる。

当時とは比べようもなく遙かに進歩した膨大な量の兵器が、誰にも管理されないまま存在し、そしてそれは用途の如何を問わず経済原則にのっとり取引され、密かに闇のルートで世界中に流通している。

●米国・ヴァージニア州・ラングレー

米国^C中央情報局^Iでロシアを担当するロイ・シンプソンは、デスクの上に置かれたパーソナル・コンピュータの電源を入れると、ワシントン・レッド・スキーンズのマグに入ったデ・カフェを一口すすり、毎日の仕事を始めるに当たって幾つかある儀式の最初の項目を履行し始めた。

「O.K. ガーネット……今日はなにを覚えてくれるんだ……」

モニターに現われた文字の羅列に目を走らせた瞬間、彼は呟きとも呻きともつかぬ言葉を洩らした。それはインターネットを介して送られてきたメッセージの一つには違いなかったが、送信者が特別な任務を持っている人間である以上、『普通の』ものとは扱いが違って当然

だった。

ロイはカーソルを手慣れた手つきでその項目に移動させると、キーボードの上のPFキーを押した。二口目のデ・カフェをすすめる間もなく画面が瞬間的に変わり、要点だけを簡潔に記したメッセージがモニターいっぱいに見られた。

ガーネット

FN・FAL

二〇

七・六二×五一

四〇〇〇発

FNスナイパー・ライフル

二

RPGー7

一〇

RPGー7 弾頭

四〇

クレイモア

二〇

ステインガー発射器

二

ステインガー弾頭

一〇発

Cー4

九〇〇キロ

雷管、起爆装置

仕向地 不明 ただしオーダーは日本人と見られる
ウラジオストクを一月下旬に出港する『ナデージダ』

それはソ連崩壊後にわかに活発になったロシアン・マフィアの活動を監視すべく、モスクワで活動するエージェントの一人を介して送られてきた情報だった。日々送られてくる彼らの非合法活動の情報は多岐にわたる膨大なもので、ロイが目にしたメッセージも、さして珍しい内容のものではなかった。中でも武器取引は彼らの定番のビジネスの一つだったが、それでも今日送られてきたメッセージにはロイの注意を引くところが幾つかあった。

オーダーは日本人と見られる？

ロイの注意を引いたのはまずその一点だった。

こいつは初めてのケースだな……。

ロイは小首を傾げながらそのメッセージをもう一度最初から読み返すと、パーティションの壁面に据え付けられた書架から、ロシアの港に出入港する外国航路船舶のスケジュール・ブックを取り出した。ロシアの港に出入りする船舶、特にロシア船のそれがスケジュール通りに運航されるとは限らないことをロイは知ってはいたが、それでも目星をつけるには十分こと足りる。

ロイは慌ただしい仕草でページを捲めくると、ウラジオストクの項目から『ナデージダ』の船名を探しだした。

『ナデージダ』 発一月三一日

仕向地 シアヌークビル 着二月二〇日

「こいつか……」

ロイはそのスケジュール・ブックを広げながら、今度は、最初に注意を引いた二つ目の事柄に、少しの間考えを巡らした。

カンボジア行きの船に武器……？ たしかにあの国ではまだまだ武器を必要とする連中がゴマンといるが、それにしても今回のオーダーは少し内容が変だ。まず自動小銃だが、そんなものはわざわざロシアから入手しなくとも、ソ連製、中国製のAKがそこらへんにごろごろしている。FN・FALのような西側のものが欲しいならM—一六が簡単に手に入るはずだ。数量もずいぶん中途半端だ。RPGだって現地調達するのは簡単だ。それにステインガーにC—4が九〇〇キロ？ なんだってまた、こんなものを欲しがるんだ。

ロイの手が自然に電話に伸び、暗記していた内線の番号をブッシュし始めた。日本担当のセクションの番号だった。

「リック・スナイダー……」

相手はすぐに出た。

「ロイ・シンプソンだ。少し聞きたいことがある……」

ロイは自分の名を名乗るとすぐに、しかし言葉に気をつけながら用件を切り出した。

「今、日本で武器を必要としている組織で思いつくようなものはあるか」

ここで働く人間達には、その職分と責任に応じて、携わることができるとは厳密なルールが設けられている。資格と許可なしに、やみくもに自分が知る情報を他人に話すことはできないのだ。それは時として組織の硬直化を生み、また効率的な組織運営を著しく阻害する要因となったが、国家の安全を担う機関ならばいずれもが持つ、相反する矛盾であり、永遠に解決できないテーマに違いなかった。

「そうだな……ヤクザ……それに」

「それに？」

「まあ、左翼の過激派といったところだろうが、今現在で言うなら、やはりヤクザに限られると言っているだろうな」

「そうか。で、連中はこういった武器を必要としてるんだ」

「せいぜいが拳銃程度のものだろう。事実中国からはトカレフ、フィリピンからはコピーの密造銃が大量に流入しているからな」

「自動小銃やRPGといったやつはどうだ」

「自動小銃やRPGだって？」

スナイダーは笑い出した。

「ロイ、知っての通り、あの国は世界でも最も安全な国なんだぜ。ヤクザが拳銃を所持していてもニュースになるような国なんだ。そうそう、自動小銃といえば、ちょうど一年前に東京の近郊で中国マフィアが五人、マシンガンで射殺される事件があったが、あのときには日

本の警察は上を下への大騒ぎになったものさ」

「それはヤクザの仕業だったのか」

「ついぞ手がかりすら掴めなかったようだが、多分それはないだろう。少なくとも日本のヤクザではないな。そんなことをしてかせばどんな目に遭うか、彼らはよく知っているからね。日本の警察は黙っちゃいない。徹底的にそいつがいた組織を潰しにかかってくる。ましてやRPG？　ありえないね」

「そうか……過激派組織はどうなんだ」

「かつては赤軍のような過激テロ組織があったが、メンバーの多くは捕まったか、例のハイジャックの際に日本政府が行なった超法規的措置というやつで、国外に出てしまっている。その後国内の過激派組織の活動は主に対立組織との内部抗争に向けられ、そこで使用されるのは、鉄パイプやバールといった、どこでも手に入るものがせいぜいで、とうてい武器と呼ばれるような代物ではない」

スナイダーは、受話器の向こうのロシア担当の元に日本に絡むなんらかの情報が入ったことを感じ取っていたが、あえてその質問をするようなことはなかった。もしも関係があるのなら、厳密なルールの下に、しかるべきルートを通じて、情報は寄せられてくるはずだった。情報に対する正式な評価はそれからいいのだ。そして今自分が話したことは、組織が決めた規則にもなんら抵触するものではなかった。

せいぜいが拳銃程度か……。

ロイはスナイダーの言葉を聞きながら、モニターの上のメッセージを再び読み返した。

それはあまりにも日本の現状から遊離したメッセージと言わざるを得なかった。RPGどころか、携帯用地対空ミサイルのステインガー、対人用地雷のクレイモア、それに九〇〇キロものC-4。どう考えてもこれらが日本に渡る物とは思えなかった。それにオーダーした人間も日本人らしいというだけで、日本人だと断定されたわけではない。

「そうか……参考になった。ありがとう」

「どういたしまして」

ロイは受話器を置くと、ロシアからのメッセージのプリントアウトにかかった。

さて、この情報をどうするかだが……。

ここに日々寄せられる膨大な量のメッセージの中で、最もプライオリティが高いのは米国に直接的脅威となるものに違いなかった。なにしろこの組織の運営資金を出しているのは日本人でもなければカンボジア人でもない。米国民の税金が一〇〇パーセント使われているのだ。そうして考えると、優先すべき事柄は他にまだたくさんあった。そして自分は、不確実な上にアメリカにとって直接的脅威とならない情報を自動的に上に流すためにここにいるのではない。それを整理、評価するためにいるのだ。

ロイはプリントアウトした一枚のペーパーをレーザライターの取り上げると、キャビネットから『ガーネット』と書かれたファイルを取り出し、その中にそれをしまい込むと、モニター上に表示された次の項目を開けにかかった。それがこの三か月後、世界を震撼させ